

ストレス耐性を価値化しない

——うつ病からの退職、そして再就労の語りから——

静岡大学 荻野達史

1 目的

精神医療や心理学の現在的な知や臨床実践が、産業領域あるいは「就労」に関わる問題領域に浸透することによって、どのような社会的状況が生じるのか。本報告はこの一側面を捉える試みである。

日本社会においては、2000 年頃より「うつ病」対策を主に想定した産業精神保健に関わる議論と活動が急速に展開され、その状況は多面的な様相を呈している。たとえば、一部では「メンタルタフネス」、「自ラリカバリーできる新人になる」ためのストレスマネジメント研修会が開かれ、そして 2015 年にはストレスチェック制度が施行された。どちらにも労働者が「心的なもの(psy)の科学」(ローズ 1989=2006)のフィルターを通して自らを評価し統制する傾向を強化するものであろうし、後者はとくに国家による集団的な統制という意味合いも帯びている。

しかし、産業精神保健の領域では、上述のような「予防的」取り組みが喧伝される一方で、休職者に対する職場復帰支援が中心的な課題として取り組まれてきており、そこには職場集団への支援という動きも見出せる(荻野 2015)。ただし、全体の復職率は決して高くなく、退職する者の割合は高い。そして、近年、元の勤務先を退職し、失業を経て再度就労を継続するようになった人々の、自らの一連の経験についての語りが散見されるようになった。かれらの語りは、医療知識や関連情報をどのようにに取り込み、どのような「自己」、そして「仕事」に関わる言説を生み出しているのであろうか。

2 方法

退職理由は「うつ病」に限定するが、休職経験や失業に関わる経緯、再就労の形態(自営、障害者枠など)については条件を付けず、そうした自らの経験をもとに情報発信をしている人々の語りをデータとする。現時点では、書籍や web 上で発信している 3 名(30 代から 40 代の男性)のドキュメント・データが主たるものであるが、一部聞き取られたデータも含まれる。彼らの語りについては、とくに自らの経緯(諸選択の理由)と方向付け(社会的アイデンティティや労働)についての語られ方、そしてそこにおける医療的知識や付随する情報の位置付けに注目した解釈的分析を行う。

3 結果と考察

この 3 名は、自ら情報発信を継続している点にも表れているが、後続するうつ病者に対して、助けとなる情報を発信すること、あるいはそうした存在でありうる自分が自己の中核に位置付けられている。そして、その文脈の中で、共通性が高いことは、うつ病の「再発可能性」への端的な「恐怖」が、当時の職場からの離脱を決定的にしたこと、そして「再発可能性」の一般的な高さ——それは「脆弱性」の高さという表現と合わせて医学的知識・情報の性格を有する——が、好意的にも回顧される「職場・同僚」を回避する判断の合理性を強化するとともに、“ありがち”(と意味づけされる)仕事の価値や意味付けから距離を取ること(自身の仕事観の再編)へと議論が進むことである。

この社会学的含意は、日本における近年のうつ病言説が労働環境批判を内蔵させてきたという傾向(北中 2014)と並行して、精神医療的知識を取り入れ「一般的就労形態」自体を相対化する、さらにいえばストレス耐性を価値化しない「主体化」の在り方が見出せることに求められよう。

《文献》

北中淳子 2014『うつ病の医療人類学』日本評論社。荻野達史 2015『職場のメンタルヘルス対策』をどう見るか?』『静岡大学 人文論集』66(1)。ローズ,ニコラス 1989=2016『魂を統治する』以文社。